

# 四天王寺国際仏教大学(IBU)英語科における 多読授業の内容

メイソン紅子・トム・ベンダーガスト  
四天王寺国際仏教大学短期大学

## I. はじめに

IBU 英語科で多読授業を管理運営しながら、効果や効率の高い多読授業のやりかたについて、いろいろ試行錯誤を繰り返してきた。初期の頃は本を授業中にも読ませていたが、現在は、読書は主に家庭学習としている。授業時間をより有効に使うために、また、指導や管理がうまくできれば、学生が自主的に家庭で読書をするのがわかってきたからである。最近では、教師が英語でストーリーテリングをして、聞かせながら、英語に対する基本的な言語能力を養えないだろうか試みている。英語による読書の質や能力を高める以前に、話を聞いて、物語に興味を持つという体験もさせたいと思ったからである。また、目からのインプットだけでなく、耳からの Comprehensible Input (Krashen, 1985) も、読解力につながるに違いないと考えた。それには、ストーリーテリング (Elley, 1989; Shurman, 1994; Vivas, 1996) しかないと思い、授業はそれを中心に、読書には欠かせない単語の習得、つまり、Low Frequency Words (Nation, 1990) の習得を試みている。家庭学習の読書については、その管理を毎週行っており、学期末テストに合格するには指導されたように読書をするしかないと思われ、多読にふさわしいと思われるテストを実施し、合格点を取らない学生には不可を与えている。

以下に、授業の目的について、オリエンテーション・ブックレットについて、この授業の軸となっている家庭学習の多読について、また、その補佐的な役割をしているストーリーテリングの授業とクローズエクササイズについて、評価となる多読の効果について、そして、多読授業を可能にする条件について述べる。

## II. 授業の目的

多読授業の目標は、精読中心の授業を受けてきた学生達に、英語の本が多数あるという環境の中で、読書の機会を与えて、読書の喜びを体験させながら、読む訓練をさせ、また、やさしく書かれたものであっても、世界の名作なども読むことによって、人生の諸問題について考える機会を与え、読書が生活の中で習慣となるように指導しながら、読解力を高めていくことである。また、卒業後も英語による読書を実践したいという気持ちを培い、さらに能力をより高めていくことができるような基盤を作ることである。

具体的には、 Semesterごとに目標があり、最初の Semesterではガイドドリーダーの初級レベルを、次の Semesterでは中級レベルを、第三の Semesterは上級レベルを、そして最後の Semesterには一般洋書 (ネイティブの5年から8年生レベルの本、あるいは、ベストセラー等) を学生のレベルに応じて読めるようになることを目標としている。どのレベルにおいても、80%の学生が合格点をとれることを目的と

している。

## III. オリエンテーション・ブックレット

多読授業について予備知識のない学生に、どういう授業であるかを説明する 30 ページ程の小冊子である。内容は、まず、多読と精読の違い、多読の必要性、家庭学習の仕方、多読の効果、そして最後に、在学生と卒業生からの率直な多読授業に対する意見感想文である。それを、第一目次に渡し、宿題として、読ませて、感想文を持ってこさせると、100% 近くの学生が、「意図が良くわかったし、同意するので、指導に従って、与えられた課題をこなすよう努力してみる」と意欲を表現する。「先輩の経験を読んで、勇気が湧いた、自分がどれだけできるか楽しみである」と結ぶ。

## IV. 多読

(1) 教材 オックスフォードやハイネマン出版社等によるガイドドリーダーズや、アメリカの小学校中高学年や中学生向けの本。または、アメリカの高校生で読書が苦手な生徒を対象に、小学校5年生レベルで書かれた本などを使っている。在学生が、一年生と二年生を合わせて約 500 人程いるので、多読室には約 3000 から 4000 冊のガイドドリーダーズを揃えている。

(2) 読書量 Semester毎に 1,000 ページを目標にしている。年間 2,000 ページである。これは、単語数にすると、約 50 万語となる。ネイティブの子供の読書量が、年間平均約 100 万語であるらしいので (Nagy, Herman, & Anderson, 1985; p.250)、その半分となる。IBU の学生の実際の平均読書量は、ある年の調査によると、2年間で、2819.332 ページ (S.D. = 880.654, Min = 1141, Max = 6523, Range = 5382, N = 220) である。学生は一週間に、600 語 (基礎) レベルの本なら 4 冊、1100 語 (初級) レベルなら 3 冊、1600 語 (中級) レベルなら 2 冊、そして、2200 語 (上級) レベルなら 1 冊読むように指示を受ける。どの学生も基礎レベルから始めるが、個人の能力とやる気に応じて、進むので、読書量にもレベルにも一ヶ月もすれば差が出てくる。1 Semester目の終わりにすでに中級レベルを 2、3 時間で読む学生もいれば、まだ基礎レベルの学生もいる。しかし、ほとんどの学生は 1 Semester目は初級レベルを読んでいる。

(3) 学生の家庭学習内容 読んだ本については、すべて、その題名、著者、出版社、ページ数、読むのにかった時間、そして、目付をノートの上段に記入し、その粗筋を英語あるいは日本語で記録する。また、その本についての意見感想や、本が難しかったかどうか、何が難しかったかなどの、自分の読解力についての記録も同時に書く。また、単語や、気に入った表現、そして、質問などもノートに記入する。ノートは毎週、授業の際、提出する。

(4) 教師の仕事内容 提出されたノートに目を通し、どの本を何分で読んでいるのか、その本を読んで、どう思ったのか、また、本当に読んだのかどうか、そして、学生がノートに書いている質問に答えたり、次のレベルに進めそうな学生にはそのように指示を出すなど、個人的にフィードバックをノートに書いて、なるべくその日のうちに返却する。

#### V. 授業

教材 ストーリーテリング用に出版されている4、5冊の本から、適当な話を選び、それを使っている。

手順(1) 授業で使う話の中から難しそうに英単語を約20から25選んで、リストにして置き、それをテストとしてやらせる。日本語の意味を書くように指示する。(2) 答えあわせはしないで、教師が15分から20分かけて、英語で一つ話をする。その授業で教えた単語は板書してあり、話の中にその単語が出てくると、板書してある単語を指しながら、名詞の場合なら、類似語や反対語、動詞の場合には、現在形や過去形を使って、例を出して説明したり、絵を書いて示したりしながら、話していく。(3) その後、簡単な質問をして、学生の理解度を調べる。質問する時、その授業で教えた単語を使ったり、答えがその単語になるように質問する。(4) その後、最初に渡したテストを使って、二回目のテストをする。(5) 答え合わせをする。この時、初めて、日本語を使う。(6)

話のテキストを学生に与えて、7、8分で読ませる。読みながら、単語にハイライターでマークさせる。(7) その後、ペアになって、同じ話を学習相手に英語で話す。その時、板書された単語だけをヒントにひとり10分程話す。

このようにして、授業中、リスニング、リーディング、スピーキングの機会を学生に与え、単語を学習する。以前は、前の週に読んできた話について、英語で粗筋を話すようにさせていたが、難しいらしく、無理にやらせているという感じがあった。ところが、この方法に変えてから、教師から聞いたばかりの話を、単語の意味も理解し、その話を読んで意味や大意を確認した後では、話すのにちょうどよい難しさになっているようで、どの学生も、Retellingができるようになった。二人ずつペアになってやらせて、一人余る場合は、教師が学習相手になって、聞いていると、内気そうで、目立たない学生まで、学習したばかりの単語を駆使して話すので、嬉しい驚きに満たされるという付録までつくようになった。

(8) 時間が余れば、もう一度同じテストをする。

#### VI. クローズ練習帳

4ページからなる一つの話が穴埋めの練習問題になっている。一冊の中に7つ程の話が入っている。それをセメスター毎に一冊ずつやらせている。EFLの教材ではなく、ネイティブの小学校中学年向けの練習帳である。授業で一つの話と一緒にやり、始めるきっかけを作ってやり、後は、家庭学習として、休暇中に活用する学生が多い。

#### VII. 評価

学生の能力を評価するため、テストは4種類行っている。一つはTOEICで、入学時と卒業時に、英語科全体の評価の一つとして実施されている。次は、読解力を総合的に評価す

るという(Madsen, 1983; P.7, P.52) クローズテストである。約1600語からなる短い話の中に、10語毎に単語を消して100の空白を作り、最も適当な単語を書き込んでいく60分のテストである( $r = .87$ )。もう一つは、90分の読解力のテストで、1セメスター目は初級レベルの本の中からひとつ本を選んで、そこから17、8ページ読ませて(約4500字)、100問の質問に答えさせる。セメスターごとにテストのレベルも上げていく。4セメスター目は6年生から8年生レベルの洋書を使っている。四つ目のテストは単語のテストである。現在は主にストーリーテリングの中に出てきた単語を最後にまとめて、行っている。

(1) 1993年卒業生のTOEICリーディング・セクションの結果は、入学時は約平均123点程(S.D. = 35.19, Min. = 35, Max. = 225, N = 224)で、卒業時には平均173点(S.D. = 39.91, Min. = 90, Max. = 285, N = 244)となっている。毎年良く似た結果である。TOEICのリーディング・セクションは495点満点であるから、卒業時の平均173点は決して満足できる成績ではないが、TOEICがNorm Referenced Testであること、学生の入学時の能力が高くないこと、そして、テスト時間内に終わらせることが出来ないことを考慮に入れている。

また、入学時と卒業時との間に有意差があるかどうか調べたところ、6クラスの間には差はないが( $F = .6493$ ,  $p = .6622$ ,  $MS = 1300.5$ ,  $df = 5$ )、テストの間には有意差がある( $F = 362.4030$ ,  $p = .0000$ ,  $MS = 307287.2$ ,  $df = 1$ )と分かった。

(2) 小学校6年生レベル(Flesch Grade Level = 6.8)の100点満点のクローズテストでは、入学時には平均が25点から29点ぐらいであるが、卒業時には平均50点前後になる。つまり、入学時には辞書を使用しても読むのが難しいが、卒業時には、辞書があれば、読めるレベルに達するということを意味している。採点方法は、文法が正しく、良く似た単語であれば、正解としている。

(3) 1996年1セメスター目の一年生の読解力テストには、オックスフォード社のブック、ワーム、シリーズからステージ3の本を使ってテストを作り、行った。結果は、最低点が34点、最高点が92点、平均は68.7点(S.D. = 12.85, N = 243)で、58点以下のものは22%であった。二年生用のテストは、ネイティブの小学校高学年向けの本の中から、一つエピソードを使って作った(Shizuko's Daughter by Kyoko Mori)。最低点は32点、最高点は86点、平均は63点(S.D. = 10.35, N = 237)で、これは58点以下が30%だった。テストに使った本は一般洋書の部類なので、3セメスター目にしては、よくできたと思う。

(4) 読む速さは、入学時には、ハイネマン社の600語レベルを25分で読む者から、50分かかる者までいるが、卒業時には、80%の学生が中級(1600語)レベルの本であれば、2、3時間で読むようになる。つまり、入学時には、基礎(600語)レベルを、分速約50字で読んでいても、卒業時には、中級レベルなら、分速約100語から150語の速さで読むようになる。

(5) ストーリーテリングの単語習得における効果については目を見張るものがある。次の表は上記の方法で授業をした時

の結果である。

テスト	人数	最低点	最高点	平均点	S. D.
Pre-test	83	2	15	7.457	2.947
Mid-test	83	5	24	15.156	3.752
Post-test	83	19	25	24.192	1.347
Follow up	83	8	25	17.506	3.482

話を始める前は、約7単語知っていた。話を聞いた後は、8単語増えて、15単語知っていた。授業の終わりには25単語のうち24単語覚えた。一ヵ月後には約7単語忘れて、17単語に減っていた。一回の授業で10単語習得するのだとすると、15回の授業で150単語習得できることになる。一年30回授業があると、300の新しい単語を習得することになる。ネイティブが年間約750から5,500単語 (Nagy, Herman & Anderson, 1985; p.250)、あるいは1,000から2,000単語 (Nation, 1990; p.11) ということであるから、学校で、あるいは、家庭学習で、一週間に後二つ、話を聞くようにさせれば、それに近くなるかもしれない。

(6) アンケートをして多読から何を学んだかという質問をしたところ、188人から回答を得た。多読から学んだものは、まず読解力 (132人)、読む速度 (131人)、単語力 (91人)、読む習慣 (69人)、文学鑑賞 (57人)、作文力 (50人)、文法 (41人)、話す力 (38人)、前置詞の知識 (17人) という結果であった。また、その100%の学生が、多読授業を後輩に勧めると応えた。

#### Ⅶ. 多読授業を可能にする条件

より効果の高い、また、効率のよいプログラムを作るため、改良していきたいと思っているが、IBUで長年、多読授業が存続し、ある程度の効果を上げている理由は、次にあると思う。まず、(1) 環境。学校と同僚の多読に対する理解と支持である。IBUの経済的な援助と理解なしには、何千冊もの本を購入することも、またそれを展示し管理する多読室の存在も有りえなかった。豊かな環境を作れたことは幸運であった。また、職員や同僚の支持と援助の力も多大である。多読授業の価値を理解し、学生指導をしてくれるのは、大変な難しいことである。学校全体の支援は新しいプログラムを計画実施する際、大変重要な要素である (Brown, 1995)。(2) 切迫感。IBUでは多読授業は必修授業である。面倒なことはなるべくしたくないのが、私たちの性質であるから、英語による読書は、EFLとして英語を学んでいる学生にとって必要性に欠けるので、難しいと思う。自主的に読書が出来るようになるまで育てた後なら選択科目でもよいと思う。(3) 決意。多読授業を始める前に、オリエンテーション・ブックレットを読ませる。たくさん本を読むことは必要であると理解し、指導に従うと、学生は意思を表明する。納得して始めるのと、そうでないのでは、大きな差が出てくる (Ikeda & Mason, 1994)。(4) 管理。教師が学生のノートを毎週チェックすることによって学生の読書学習の管理をしている。また、テスト勉強は本を読むことであると理解させ、本を推薦したり、本について意見感想を交換したりしながら、より多くの本を読ませようと努力している。本当に読ませるといことが、な

かなか難しいところである (Paulston & Bruder, 1976)。読まずに済むなら、読まないからである。(5) 楽しい読書。理解できる本を読ませて、読書の楽しさを体験させる。(6) 刺激。最近では、オックスフォード出版社主催のブックワームシリーズ・ブックレポートコンテストに全員参加させた結果、一人入賞者が出た。学生の間で、やれば、何か手応えがあるという励みになったと思う。退屈しないプログラムにする工夫が必要だと思う。

#### Ⅸ. おわりに

読書をする時、読解力だけでなく、単語やスペルや、他の教科にまで良い影響を及ぼすという調査報告がある (Cho & Krashen, 1994; Elley & Mangubhai, 1985; Elley, 1989; Elley, 1991; Krashen, 1984; Krashen, 1985; Krashen, 1989; Krashen, 1993; Wodinsky & Nation, 1988)。また、多読は、英語が好きで、成績の良い学生だけに効果があるのではなくて、英語が不得手で、あまり英語に興味のない他学科の学生にも、同じように効果があり、精読授業よりも、多読授業の方が、読解力養成に優れており、そして、多読が英作文に良い影響を与えるようだという報告もある (Mason & Krashen, in press)。

英語を外国語として学習している学生にとって、英語による読書の機会は少ない。そうであるから、なおさら、学校で与える英語による読書教育の習得効率をより良くすることが望まれる。より効果の高い教授方法と、より公正な評価方法を探したり、作ったりしながら、学生の英語力向上のために、多読授業を改良していきたいと考えているところである。

#### 謝辞

四天王寺国際仏教大学短大英語科における多読授業運営管理においては、大学の理解と協力に多大の感謝をするとともに、同大学教務の安福恭子さんに常日頃の雑務およびその他の援助に感謝します。

#### 参考文献

- Cho, K. S. & Krashen, S. D. (1994). Acquisition of vocabulary from the sweet valley kids: Adult ESL acquisition, *Journal of Reading*, 37:8, 662-667.
- Brown, J. D. (1995). Language program evaluation: Decisions, problems and solutions, *Annual Review of Applied Linguistics*, 15, 227-248.
- Elley, W. and Mangubhai, F. (1983). The impact of reading on second language learning, *Reading Research Quarterly*, 19: 53-67.
- Elley, W. (1989) Vocabulary acquisition from listening to stories, *Reading Research Quarterly*, 24 (2), 174-187.
- Elley, W. (1991). Acquiring literacy in a second language: the effect of book-based programs, *Language Learning*, 41(3), 375-411.

- Ikeda, M & Mason, B. (1994). The practice and effect of an extensive reading program at university, *Bulletin of the Chubu English Language Education Society*, 24.
- Krashen, S. (1984). *Writing. Research, theory and applications*, New York: Pergamon Press.
- Krashen, S. (1985). *Inquiries and insights*, Hayward, CA: Alemany Press.
- Krashen, S. (1989). We acquire vocabulary and spelling by reading: additional evidence for the input hypothesis, *The Modern Language Journal*, 73 (4), 440-464.
- Krashen, S. (1993). *The Power of Reading*, Englewood, Colorado: Libraries Unlimited.
- Madsen, H. (1983). *Techniques in testing*, New York, NY: Oxford University Press.
- Mason, B & Krashen, S. Extensive reading in English as a foreign language, *System* (in press).
- Nagy, W. E., Herman, P. A., & Anderson, R. C. (1985). Learning words from context, *Reading Research Quarterly*, 20 (2), 233-253.
- Nation, P. (1990). *Teaching and learning vocabulary*, Massachusetts: Heinle & Heinle.
- Paulston, C. B. & Bruder, M. N. (1976). *Teaching English as a Second Language; Techniques and Procedures*, Boston: Little, Brown and Company.
- Shurman, D. (1994). Storytelling: A way of feeling the imagination, *The Journal of the imagination in Language Learning*, 11, 40-44.
- Vivas, E. (1996). Effects of story reading on language, *Language Learning*, 46 : 2, 189-216.
- Wodinsky, M. & Nation, P. (1988). Learning from graded readers, *Reading in a Foreign Language*, 5 (1), 155-161.

This paper outlines the 13-year old *Tadoku* or Self-Selected Extensive Reading Program at International Buddhist University's Junior College. The program's classroom approach to Low Frequency Word vocabulary acquisition utilizes storytelling to complement at-home reading (Goal: 1,000 pp./ semester; Actual: 700+pp). The paper sets forth the goals of the program, introduces a specially-designed 30-page "Orientation to *Tadoku*" booklet, describes the home-reading and classroom storytelling elements, explains evaluation procedures and results, and defines the conditions for a successful *Tadoku* program.